

No.100 人文学会 35 周年・『人文研究』第 100 集記念号



【発刊】1988 年

人文学会 35 周年・『人文研究』第 100 集を祝って—山田 操, 向井 俊二,
大林 文彦, 神川 正彦, 中西 治, 工藤 喜作, 工藤 喜作

大衆化時代の宗教—解放神学研究(1)— 前川 清太郎

“現代 DDR 文学をめぐる二,三の問題について—ビーマン事件以後(下)
—” 塚田 眞幸

欧米における幼児言語習得研究の沿革(中)—伊藤 克敏

プリハッド・アーラニヤカ・ウパニシャットVI・1-3—原典および解説— 湯田
豊

チェスター=サイクル劇(V) —橋本 侃

＜研究ノート＞ 土地と人のパンセー宮井 隆

＜資料紹介＞明治前期に於ける—真言宗寺院の研究(その 1)—『観音寺日
譜』を素材にして— 中島 三千男

＜資料＞『人文研究』総目録・執筆者目録 他

No.99 小沢 勇教授退職記念号



【発刊】1987 年

小沢勇教授略歴・送る言葉 一東 保憲, 橋本 侃

地理学の総合的立場と国家社会の理念型—宮井 隆

脱近代化の目ざす課題—近藤 正栄

『チャタレイ夫人の恋人』について —生命の優しさ— 江頭 輝雄

ヴューダーンタの精髓(Ⅱ・完) —湯田 豊

チェスター=サイクル劇(Ⅳ)—橋本 侃

欧米における幼児言語習得研究の沿革(上)—伊藤 克敏

日本語教育に関する比較考察—イギリス スイス 並びに日本の大学のケー
スについて— 上條 雅子

CHARLES PEGUY et MAXIME VUILLAUME autour de la publication de
＜>(2) —Kiyoshi KURATA

＜資料ノート＞ 占領期大阪における日本赤十字奉仕団の活動(一断面)—日
赤大阪府支部奉仕課『農繁保育所関係書類』(昭和 26 年度)— 吉原 直樹

No.98



【発刊】1987 年

日本赤十字奉仕団成立史稿(2・完)—大阪を中心として—吉原 直樹

安部公房の文体—『棒』『砂の女』の表現様式—
—高野 繁男

アントニオ・グラムシの教育論への序章—黒沢 惟昭

ヴェーダーンタの精髓(Ⅰ)—湯田 豊

チェスター=サイクル劇(Ⅱ)—橋本 侃

CHARLES PEGUY et MAXIME VUILLAUME autour de la publication
de<>(1) —Kiyoshi KURATA

言語学と民話の構造 —古岩井 嘉蓉子

<書評>小林一美著『義和団戦争と明治国家』—山口 建治

No.97



【発刊】1987 年

荒井義明教授略歴・追悼文—村田 康彦, 伊藤 克敏

カルデロン作「密かな屈辱に密かな復讐」ならびに「不名誉の絵師」の人物
—レオノールとセラフィーナの罪をめぐって—岩根 圀和

ブリハッド・アーラニヤカ・ウパニシャッドⅤ—岩根 圀和

チェスター=サイクル劇(Ⅱ)—橋本 侃

オルダス・ハックスリーと短編小説(上)—「サー・ハーキュリーズ」を中心とし
て— 須藤 明

『会話能力の発達過程に関する一考察』—伊藤 克敏

フル退場—問題劇の視点—佐久間 直子

No.96



【発刊】1986 年

A・グラムシの市民社会論についての一考察—黒沢 惟昭

「人生は夢」:セヒスムンドの再生—胎のイメージをめぐって—
—岩根 圀和

<<小林多喜二・1928>>への視角—活動写真と弁証法のこと—日高 昭二

『翼ある蛇』試論—再生を求めて—江頭 輝雄

チェスター=サイクル劇(Ⅰ)—橋本 侃

Children and the Metaphorical Expressions —古岩井 嘉蓉子

Glosas Silenses 研究 Ⅲ—太田 強正

No.95



【発刊】1986 年

『恋する女たち』にみられる否定的要素 ―ジェラルド・クリッチの場合― 江頭 輝雄

エピクロス思想の成立を探ねて ―その生き方と人間観とを中心に― 岡野 哲士

旧約聖書―湯田 豊

文学作品についての言語学的文体論の一考察―小岩井 嘉蓉子

ENCOUNTER WITH COLIN PEACOCK A PSYCHOLINGUISTIC APPROACH
TO TEACHING WRITING―Harumi Kurotani

No.94



【発刊】1986 年

「歌行燈」考―文学伝統と翻訳の問題をめぐる―ジョン・ボチャリ

カルデロン劇の人物「ドニャ・メンシーアについて」―岩根 圀和

人文研究とわたくし―湯田 豊

エピクロスが愛し求めた知―キケロの批判を介しての考察―岡野 哲士

「幼児音と方言音との相関性に関する一考察―伊藤 克敏

PERSONA HUMANA Y SOCIEDAD en la filosofia de―J.Maritain Amadeo
Illera B.

No.93 前川清太郎教授退職記念号



【発刊】1985 年

明治末年の鷗外―前川 清太郎

抒情詩の表現様式―「四季」派における主体と時間の展開―高野 繁男

『西遊記』と神話・祭祀―「人参果物語」の読み方―鈴木 陽一

内村鱸香伝記考証序説〔中〕―佐野 正巳

読書の現象学への序説―鈴木 修一

“エズメの苦界―Salinger gFor Esme with Love and Squalor”に関する一考
察― 一向井 俊二

リグ・ヴューダの哲学詩―湯田 豊

青春の模索 ―ポール・ツ激汲7場合―江頭 輝雄

馮夢龍と「開読の変」―馮夢龍事跡考 ―山口 建治

Glosas Silenses 研究Ⅱ
―太田 強正

No.92



【発刊】1985 年

西洋哲学史の学び方—湯田 豊

コメニウス・ルソの「自然」と「教育」(上)—鈴木秀勇教授の教育研究方法意識に触れつつ— 黒沢 惟昭

われわれとは何か —現象学における「共同人間存在」の問題— 鈴木 修一

No.91



【発刊】1985 年

『息子と恋人』の一側面 —父と母と子の関係— 江頭 輝雄

中世スペインにおける王族とユダヤ人の関係—ユダヤ人侍医をめぐる— 藤田 一成

ヘーゲルとドイツ初期ロマン主義—伊坂 青司

起源への夢—鈴木 修一

『言い誤りの心理言語学的考察』—伊藤 克敏

二つの「羊飼いの劇」—ジャック=ガルキオとマック(Ⅱ)— 橋本 侃

No.90|



【発刊】1984 年

“ヘミングウェイにおけるスポーツの論理と効用—“Soldier's Home”を中心に—” — 向井 俊二

ウパニシャッドの哲学について — 湯田 豊

Glosas Silenses 研究 I — 太田 強正

二つの「羊飼いの劇」—ジャック=ガルキオとマック(Ⅰ)— 橋本 侃

マンハッタン・オデュッセイ(1977~1982) — 小川 水尾

No.89



【発刊】1984 年

近代合理主義文学(後期)—文学批評の原理と英文学(9)— 近藤 正栄

グラムシの「ヘゲツ」論を回る若干の問題点(上)—片桐薫『ヨーロッパ社会主義の可能性』を読んで— 黒沢 惟昭

詩劇と伝統『元老』からみた T・S・エリオットの文学像— ジョン・ボチャリ

No.88



【発刊】1983 年

近代合理主義文学(前期)－文学批評の原理と英文学(8)―― 近藤 正栄

ラ・グアルディア村儀式殺人事件(2)―スペインにおける血の中傷― 藤田 一成

「拍案驚奇」に描かれた女性 ―間蜚蛾の場合― 山口 建治

トインビーと宗教(2) ― 湯田 豊

＜書 評＞『スペイン帝国の興亡』1469～1716 ― 宮井 隆

Walter Pater の短篇小説における特質の考察 ― 小泉 公史

歴史学と歴史人口学(その 2) ― 岡島 千幸

No.87



【発刊】1983 年

『コロンブス研究』(その 5)コロンブスの結婚をめぐる ― 青木 康正

内村鱸香伝記考証序説[上] ― 佐野 正巳

ラ・グアルディア村儀式殺人事件(1)―スペインにおける血の中傷― 藤田 一成

トインビーと宗教(1) ― 湯田 豊

高度技術社会における日本的経営と労働者 ― 横倉 節夫

William Morris ユートピア「無何有郷だより」の研究 ― 小泉 公史

No.86



【発刊】1983 年

ユダヤ人に対する血の中傷―儀式殺人および聖体冒?めぐる― 藤田 一成

地域区分論から類型論へ―研究史的反省から― 宮井 隆

ある幻影の未来―フロイトと宗教― 湯田 豊

こどもの言語発達と家庭環境 その 2 家庭環境要因の言語能力群差の分析 ― 渡邊 恵子

No.85



【発刊】1983 年

フィヒテの「自己規定への要請」について — 工藤 喜作

ロマン主義文学 —文学批評の原理と英文学(7)— — 近藤 正栄

El verbo estar en el espanol coloquial — Jose A.Millan

歴史学と歴史人口学(その 1) — 岡島 千幸

No.84



【発刊】1983 年

フィヒテにおける個体概念 — 工藤 喜作

中観と唯識 — 湯田 豊

『金瓶梅』の表現方法について(1)—『水滸伝』との重複部分を中心に— — 鈴木 陽一

社会と個人の主体性(下)—ジンメル社会学の再検討— — 横倉 節夫

El verbo ser en el espanol coloquial — Jose A. Millan

No.83



【発刊】1982 年

中世におけるスペイン.ユダヤ社会の没落—迫害の爪痕— — 藤田 一成

ヨーガ — 湯田 豊

社会科と個人の主体性(上)—ジンメル社会学の再検討— — 横倉 節夫

ホップズにおける実体と偶有性 — 工藤 喜作

スタール夫人の神秘主義について — 佐藤 夏生

No.82



【発刊】1982 年

悲劇的効果の一断面(Ⅱ)—感情のアンビヴァランスの問題を中心として— — 鈴木 英允

イスパニダーの歴史的系譜 — 石井 陽一

古典的サーンキヤの体系 — 湯田 豊

Varios aspectos de1 lenguaje coloquialy su importancia — Jose A.Millan

No.81



【発刊】1982 年

ユダヤ社会再生の気運 — 藤田 一成

合理主義・フュマニズムの文学(下)ー 文学批評の原理と英文学(6)ー — 近藤 正栄

こどもの言語発達と家庭環境 その 1 こどもの言語発達測定具の再検討 — 渡邊 恵子

重回帰分析による英語能力再考 — 大友 賢二

<<デルフィーヌ>>から<<コリンヌ>>へ 小説におけるスタール夫人の宗教観の軌跡 — 佐藤 夏生

No.80



【発刊】1981 年

社会教育における国家の問題—小川社会教育論の検討を通して— — 黒沢 惟昭

ニヤーヤ学派の認識論と論理学 — 湯田 豊

『コロンブス研究』(その 4)コロンブスの結婚をめぐる — 青木 康征

左大文字地域におけるシンルイ意識—シンルイ講造・呼称・伝統行事との関連— — 和崎 春日

No.79



【発刊】1981 年

ビーアマン事件以後(上)—DDR 批判派の動向— — 塚田 眞幸

満州移民と農民改革—長野県旧大日向村の事件— — 宮井 隆

ヴァイシェーシカ哲学 — 湯田 豊

再びスペイン語の再帰文について — 橘川 慶二

ワーズワスの『マイケル』について — 岩崎 豊太郎

バーナド・ショウのラファエロ前派劇「キャンディダ」についての考察 — 小泉 公使

EL LENGUAJE COLOQUIAL Una introduccion — Jose A.Millan

No.78



【発刊】1981 年

悲劇的効果の一断面(1)—感情のアンビヴァランスの問題を中心として— — 鈴木 英充

初期マルクスの人間=社会=教育観 —現代教育学批判序説— — 黒沢 惟昭

バガヴァッド・ギーターの倫理思想 — 湯田 豊

合理主義・ヒューマンイズムの文学(上) —文学批評の原理と英文学(5)— — 近藤 正栄

積木分類課題におけるティーチング・スタイル —その 2:事例研究 — 渡邊 恵子

No.77



【発刊】1980 年

マキアヴェリィの Fortuna と Virtù について — 工藤 喜作

ジャイナ教の教義 — 湯田 豊

マラマッドの文学におけるユダヤ人(続) — 向井 俊二

『コロンブス研究』(その 3)コロンブスの結婚をめぐる — 青木 康征

ヘーゲルの教育観について(3)—『法の哲学』を中心に— — 黒沢 惟昭

文学と文明 — 山本 新

故 山本 新 先生を悼む — 工藤 喜作

バンジャマン・コンスタンにおける死 — 佐藤 夏生

No.76



【発刊】1980 年

マラマッドの文学におけるユダヤ人 — 向井 俊二

ルネサンス文学の二つの流れ(下)—文学批評の原理と英文学(4)— — 近藤 正栄

接尾辞-1e -er を持つ動詞(3) — 荒井 義明

Itala と Vulgata 俗ラテン語研究Ⅱ — 太田 強正

ドイツ亡命とチェコスロヴァキア(1933～1938)(Ⅱ)— 中村 浩平

No.75



【発刊】1980 年

「オスカー・ワイルド」の童話の考察 — 小泉 公史

『コロンブス研究』(その 2)コロンブスの結婚をめぐる — 青木 康征

ルネサンス文学の二つの流れ(中) — 文学批評の原理と英文学(3) — — 近藤 正栄

初期仏教 — 再検討 — — 湯田 豊

Mississippi Diary — E.M.Carmichael

接尾辞 -le -er を持つ動詞(2) — 荒井 義明

No.74



【発刊】1979 年

『コロンブス研究』(その 1)コロンブスの結婚をめぐる — 青木 康征

クラター事件におけるアメリカ的フィクションの完成 — 『冷血』論 — — 向井 俊二

ウパニシャッド — 古代インドの呪術の世界 — — 湯田 豊

『グラスミアの住居』(Home at Grasmere)に関する一考察(下) — 岩崎 豊太郎

No.73



【発刊】1979 年

シェリング研究序説 — 工藤 喜作

『自我について』を中心にして 類型化と理念化 — 鈴木 修一

宇佐見?水伝記考証序説 — 佐野 正巳

「三言」の一特質 — 「士人出世談」をめぐる — — 山口 建治

北摂農村の農地改革 — 箕面市の場合 — — 宮井 隆

昭和 53 年度 人文学会活動報告 —

El Alcalde de Zalamea 粃穀のイメージについて — 岩根 圀和

接頭辞 pro- を持つ英語派生動詞(2) 荒井 義明

No.72



【発刊】1979 年

ブラック・ナショナリズム考(その2)—ブラック・マズリムズを加えて— — 疋田 三良

ルネサンス文学の二つの流れ(上)—文学批評の原理と英文学(2) — 近藤 正栄

ホールデン・コールフィールドにおける反抗と成熟 — 向井 俊二

リグ・ヴェーダーの創造讃歌について — 湯田 豊

トルコの欧化による世俗化 — 山本 新

ヤコービにおける理性と悟性 — 工藤 喜作

接頭辞 pro-を持つ英語派生動詞(I) — 荒井 義明

積木分類課題におけるティーチング・スタイル:日米の母親と教師の比較 — 渡邊 恵子

No.71



【発刊】1978 年

心理的なものと理念的なもの —フッサール著「数の概念について」論文の一考察— — 鈴木 修一

ヤコービにおける直接知としての信仰 — 工藤 喜作

『屠殺場五号』・戦争と平和へのアプローチ — 向井 俊二

文学の二性性相原理と中世文学—文学批評の原理と英文学(I)— — 近藤 正栄

昭和 52 年度 人文学会活動報告 —

Itala と Vulgata 俗ラテン語研究(I) — 太田 強正

No.70



【発刊】1978 年

日本古代官道の復原的研究に関する諸問題 —特にその直線的路線形態について— — 木下 良

インド唯物論について—サルヴァ・ダルシヤ・サングラ第一章唯物論の哲学体系— — 湯田 豊

接頭辞 se-を持つ英語派生動詞 — 荒井 義明

アーサー・ミラー劇におけるイプセン的回想構成の展開(Ⅱ)— 鈴木 英允

ドイツ亡命とチェコスロヴァキア(1933 - 1938)(Ⅰ)— 中村 浩平

No.69



【発刊】1978 年

『メインストリート』・女と男性社会 — 向井 俊

インド哲学における存在の問題について — 湯田 豊

ユダヤ人問題の変質—コンベルソ大量出現の背景— — 藤田 一成

接頭辞 per- を持つ英語派生動詞 — 荒井 義明

『グラスミアの住居』(Home at Grasmere)に関する一考察(上)— 岩崎 豊太郎

No.68



【発刊】1977 年

スピノザの形而上学・認識・宗教について — 工藤 喜作

＜没後 300 年を記念して＞ ヤーヅニャヴァルキヤ II — 形而上学— — 湯田 豊

開拓者の後裔 —『セールスマンの死』考— — 向井 俊二

ブラック・ナショナリズム考(その 1)—ガーヴェイズムとブラック・パワー— — 疋田 三良

接頭辞 ab-を持つ英語派生動詞 — 荒井 義明

セーサル・バリェッホをめぐる一考察—その 2— — 大林 文彦

No.67



【発刊】1977 年

ウパニシャッドの哲人シャーンディリヤー再評価— — 湯田 豊

反ユダヤ主義の構造 — 藤田 一成

社会ダーウィン主義の「機能転換」(下)—アメリカ革新主義教育思想研究(2)— — 森田 尚人

ヘーゲルの教育観について(2)—『法の哲学』を中心に— — 黒沢 惟昭

No.66



【発刊】1977 年

社会ダーウィニズムの「機能転換」(上)ーアメリカ革新主義教育思想研究(1)
ー ー 森田 尚人

社会教育の国家論 ー二つの社会教育の媒介の論理ー ー 黒沢 惟昭

トインビーのルネサンス観 ー 山本 新

セーサル・バリェッホをめぐる一考察ーその 1ー ー 大林 文彦

ウィリアム・ワーズワスの『逍遙篇』(The Excursion)に関する一考察 ー 岩崎
豊太郎

‘Things rank and grooss innature’ —A study of Hamlet in terms of
melancholy (Ⅱ) ー Tsuyoshi Hashimoto

No.65



【発刊】1976 年

老人サンチャゴにおける職業人の人間像 ー 向井 俊二

インド論理学入門(下) ー 湯田 豊

高度宗教の本質剥離 ー 山本 新

＜資料紹介＞マリオ・A・マナコルダ「グラムシの教育思想」ー 黒沢 惟昭

‘Things rank and gross in nature’ —A study of Hamlet in terms of
melancholy(1) ー Tsuyoshi Hashimoto

No.64



【発刊】1976 年

スピノザの「書簡集」の研究 ー 工藤 喜作

インド論理学入門(上) ー 湯田 豊

十八世紀スペインにおける農業問題の本質ー土地所有メカニズムの解明
ー ー 藤田 一成

永井荷風ー詩心のゆくえー ー 秋山 勇造

ウィリアム・ワーズワスの「逍遙編」(The Excursion)に関する一考察 ー 岩崎
豊太郎

Auto SacramentalーⅡーExamen Sacrum と題する一篇について ー 岩根
因和

No.63



【発刊】1975 年

ヘーゲルとインド哲学 — 湯田 豊

難民の概念 — 石井 陽一

A・ハックスレー —文学と科学の問題をめぐって— 須藤 明

米国における言語学と心理学(下)—言語心理学への道標— 伊藤 克敏

「研究ノート」マーカス・ガーヴェィの幻の国家 — 足田 三良

ウィリアム・ワーズワスの「逍遙篇」(The Excursion)に関する一考察 — 岩崎 豊太郎, 岩崎 豊太郎

Auto Sacramental—(聖餐神秘劇)その形式と定義— 岩根 圀和

No.62



【発刊】1975 年

ホッブズのコナツス — 工藤 喜作

転換期のソ連外交 —課題と展望— — 中西 治

古文辞学と国学 —宣長学成立の基盤— — 佐野 正巳

英語教育の中の評価(その 1)—Criterion-referenced Test— 大友 賢二

個別学習機器とその評価(一) — 島田 昌幸

No.61



【発刊】1975 年

谷崎潤一郎の歴史小説—主として「聞書抄」について— 前川 清太郎

ネーデルラント共和国とスピノザ — 工藤 喜作

ヘーゲルの教育観について(一)—「法の哲学」を中心に— 黒沢 惟昭

中世スペインにおけるユダヤ人の役割について — 藤田 一成

孤独と文学 —理想美追求のシェリー— — 近藤 正栄

”接尾語-le, -er を持つ動詞(1)” — 荒井 義明

ウィリアム・ワーズワスの「逍遙篇」(The Excursion)に関する一考察 — 岩崎 豊太郎

No.60



【発刊】1974 年

二つの疎外の構造—メルヴィル「バートルビー」論— 向井 俊二

ホッブズの方法 — 工藤 喜作

日向国府の変遷 — 木下 良

移民と移住者の概念 — 用語の変遷とその歴史的背景— 石井 陽一

古医方と国学—国学の成立の基盤— 佐野 正巳

オネッティの「井戸」をめぐる—現代ラテン・アメリカ文学覚書— 大林 文彦

『ティンタン・アベール』考 — 岩崎 豊太郎

No.59



【発刊】1974 年

ラテン・アメリカにおける農地改革の特質 — 石井 陽一

米国における言語学と心理学の間(中) — 言語心理学への道標— 伊藤 克敏

相模国府の所在について — 木下 良

＜紹介＞シャイブリー編「日本文化における伝統と近代化」(4)エドワードサイデンスティッカー「小林秀雄論」(その二)— 秋山 勇造

バンジャマン・コンスタンの＜宗教感情＞について— 佐藤 夏生

CAI 学習プログラムに関する研究 — デザインと構成上の原則について — 島田 昌幸

“ ” “ Friedrich Naumann das deutsche Kaiserreich unter Wilhlm II. und Japan vor der Niederlage des Jahres 1945 – Eine Studie über Friedrich Naumann mit besonderer Berücksichtigung der japanischen Geisteswelt Teil - 2. ” “
— Masaki Miyake

No.58



【発刊】1974 年

言語のテキストとコンテクスト—思想史的破壊の覚書・原理論(七)— 神川 正彦

ホッブズとスピノザ — 主として方法論に関して— 工藤 喜作

＜紹介＞シャイブリー編「日本文化における伝統と近代化」(4)エドワード・サイデンスティッカー「小林秀雄論」(その一)— 秋山 勇

山上の垂訓 — 英語訳聖書と宗教的ドグマ(3)— 近藤 正栄

No.57



【発刊】1973 年

言語のテキストとコンテキストー思想史的破壊の覚書・原理論(六)ー — 神川 正彦

スピノザにおける国家と自然 — 工藤 喜作

米国における言語学と心理学の間(上)ー言語心理学への道標ー — 伊藤 克敏

＜紹介＞シャイブリー編「日本文化における伝統と近代化」(3)ロバート H. プラウアー「正岡子規と短歌の改革」ー 秋山 勇造

No.56



【発刊】1973 年

言語のテキストとコンテキストー思想史的破壊の覚書・原理論(五)ー — 神川 正彦

スピノザの国家観(8) — 工藤 喜作

孤独と文学(その 7)ー反逆児バイロンー — 近藤 正栄

京浜における都市問題の系譜(5)ー関東大震災と横浜復興(2)ー — 山田 操

欧化と国粹 — 山本 新

英語週日名の語源(2) — 荒井 義明

「随想録」と幽愁の系譜(1) — 佐々木 茂美

Friedrich Naumann das deutsche Kaiserreich unter Wilhelm II und Japan vor der Niederlage des Jahres 1945 – Eine Studie über Friedrich Naumann mit besonderer Berücksichtigung der japanischen Geisteswelt—Teil 1.— Masaki Miyake

No.55



【発刊】1973 年

ディアスポラの歴史的意味 — 山本 新

言語のテキストとコンテクスト—思想史的破壊の覚書・原理論(四)— — 神川 正彦

スピノザの国家観(七) — 工藤 喜作

孤独と文学(その六)—ワーズワスとキーツの接点— — 近藤 正栄

ロレンスの文学論についての覚え書 — 江頭 輝雄

京浜における都市問題の系譜(四)—関東大震災と横浜復興(一)— — 山田 操

「リップントロップ覚書」をめぐる — 三宅 正樹

シャイブリー編『日本文化における伝統と近代化』(2)エドウィン・マクレラン
「藤村と自伝小説」 — 秋山 勇造

20 年をかえりみて — 山本 新

人文学会の諸活動 —

人文学会学生会諸活動 —

Eine Kleine Skizze uber Kafkas Entwicklung — Kohei Nakamura

英語週日名の語源(1) — 荒井 義明

And 連用の構文について — 東 保憲

No.54



【発刊】1973 年

世界国家の亡霊 — 山本 新

言語のテキストとコンテクスト — 思想史的破壊の覚書・原理論(三)— — 神川 雅彦

スピノピザの国家観(六) — 工藤 喜作

京浜における都市問題の系譜(二)—三宅磐をめぐる— — 山田 操

「日独伊同盟条約締結要録」 — 三宅 正樹

資料と解説(下の二・完)—

No.53|文学・語学特集



【発刊】1972 年

「日本文化における伝統と近代化」ーハワード S.ヒベット「夏目漱石と心理小説」ー 秋山 勇造

バンジャマン・コンスタンスにおける死のイメージー<アドルフ>を中心にしてー 佐藤 夏生

山上の垂訓ー英語訳聖書と宗教的ドグマ(2)ー 近藤 正栄

‘Cut’とその類義語の意味分析ー 荒井 義明

No.52



【発刊】2005.3.

言葉のテキストとコンテクストー思想史破壊の覚書・原理論(二)ー 神川 正彦

スピノザの国家観(五)ー 工藤 喜作

「日独伊同盟条約締結要録」資料と解説(下の一)ー 三宅 正樹

Function and Meaning of ‘Away’ in the Verb-Particle Combinationー 荒井 義明

No.51



【発刊】1972 年

ドナルド・キーン「日本文化論」ー紹介と雑感ー 秋山 勇造

山上の垂訓ー英語訳聖書と宗教的ドグマ(1)ー 近藤 正栄

Generation of German Decompond Verbs With Double Determinants Herab Hinab etc. and their Co-Occurrence Relations with Prepositional Phrases of Place*ー 荒井 義明

OE Transition 概観ーPeterborough Chronicle 後半の英語についてー 東 保憲

No.50



【発刊】1972 年

スピノザの国家観(四) — 工藤 喜作

言葉のテキストとコンテクスト—思想史的破壊の覚書・原理論(一)— — 神川 正彦

「日独伊同盟条約締結要録」資料と解説(中) — 三宅 正樹

京浜における都市問題の系譜(一)— 三宅磐をめぐって— — 山田 操

ロシア文明の位置づけ — 山本 新

自己変容のドラマ『虹』をめぐって — 江頭 輝雄

孤独と文学(その五) — テスの悲劇 — — 近藤 正栄

ユダヤ系作家と読書—現代アメリカ文学試論— — 向井 俊二

W.ローパー「トマス・ツ A 伝」その 3—翻訳と注解— — 松川 昇太郎

“ A Semantic Analysis of “put” and Its Analogous Words ” — Yoshiaki Arai

No.49



【発刊】1971 年

孤独と文学(その四) — 『失樂園』の主題 — — 近藤 正栄

「日独伊同盟条約締結要録」資料と解説(上) — 三宅 正樹

スピノザの国家観(三) — 工藤 喜作

歴史主義と歴史及社会科学の方法論的変貌をめぐる思想史的破壊の覚書(二) — 神川 正彦

ヘルマン・ヘッセ — その精神的発展としての内面への道について — — 中村 浩平

ブレヒトのガリレイ評価をめぐって—『ガリレイの生涯』小論— — 塚田 眞幸

“ A Semantic Analysis of ‘Carry’ and Its Synonymous Words —

No.48



【発刊】1971 年

月光文明と仮晶 — 山本 新

歴史主義と歴史及社会科学の方法論的変貌をめぐる思想史的破壊の覚書(一) — 神川 正彦

宣長の優越意識(一)—学問・思想の軌跡— — 佐野 正巳

スピノザの国家観(二) — 工藤 喜作

W.ローパー「トマス・ツ A 伝」その 2 — 松川 昇太郎/nobr>

カフカの《Der Bau》 — 人間の存在基盤としての家の意味についての試論 [1] — — 中村 浩平

No.47



【発刊】1971 年

コロンブス(二)—新大陸の発見—その死— 渡部 登

スピノザの国家観(一) — 工藤 喜作

サー・トマス・ツァン(その 1)ウィリヤム・ローパー〔翻訳と註解〕 — 松川 昇太郎

聖書の翻訳における宗教的ドグマ—RSV、NEB、国語訳について— 近藤 正栄

No.46|文学・語学特集



【発刊】1970 年

黒人問題・1831 年と 1967 年—『ナット・ターナー』の告白論— 向井 俊二

「二つの文化」論争と A・ハックスレー —文学と科学をめぐる問題(中)— 須藤 明

孤独と文学(その三)—『緋文字』の悲劇性 — 近藤 正栄

八千矛物語の成立—忌部首子首の追憶— 佐野 正巳

“Willam Roper: “Life of Thomas More”” — 松川 昇太郎

二つのすみだ川 — 秋山 勇造

No.45



【発刊】1970 年

エピクロスの倫理説についての一考察 — 岡野 哲士

国際的コミュニケーションの一般意味論 —対立と協調のセマンティックス — 神川 正彦

スピノザの宗教観(二) — 工藤 喜作

内村鑑三おぼえ書き(その六) — 岩谷 元輝

No.44



【発刊】1970 年

スピノザの宗教観 — 工藤 喜作

ピューリタノンとしてのミルトン—『失樂園』を中心に— 近藤 正栄

Beowulf の不定詞 — 東 保男

S→NP + VP —Verb Pattern 試論— 山下 雅巳

サイデステッカーと荷風 — 秋山 勇造

No.43



【発刊】1969 年

歴史的説明の諸相—歴史の認識(中ノ二)— — 神川 正彦

ドイツの歴史学と極東(四)—石井菊次郎とオットー・ベッカー— — 三宅 正樹

孤独と文学(その二)—『後樂園』におけるセイタンの闘争— — 近藤 正栄

No.42



【発刊】1969 年

歴史的説明の諸相 —歴史の認識(中ノ一)— — 神川 正彦

スピノザにおける預言と哲学 — 工藤 喜作

自然法爾と横超—宗教と倫理との関わりの問題をめぐって— — 信太 正三

No.41|外国文学・語学特集



【発刊】1968 年

孤独と文学(その一)—ワーズワスの詩心の成長— — 近藤 正栄

Erasmus の描いた Thomas More 像 — 松川 昇太郎

Advanced R P について — 中村 駿夫

PARKER CHRONICLE の構文 —統語法と文体の間— — 東 保憲

No.40



【発刊】1968 年

歴史認識問題の歴史的定位 —歴史の認識(上)— — 神川 正彦

スピノザ聖書解釈の方法について — 工藤 喜作

ワーズワスの般若直観 — 近藤 正栄

内村鑑三おぼえ書き(その五) — 岩谷 元輝

No.39



【発刊】1968 年

スピノザの無限と宇宙 — 工藤 喜作

歴史叙述のコンシスタンス—歴史のことば(下)— — 神川 正彦

文明の変動と世俗化(下)—世俗化の比較研究— — 山本 新

「二つの文化」論争と A・ハックスレー —文学と科学をめぐる問題(上)— —
須藤 明

No.38



【発刊】1968 年

「ベニト・セレノ」再考 — 向井 俊二

H・リードにおける正統の探求 —アナキズム論の文芸論史的背景とその内
容— — 相原 幸

テューダー朝前期劇の展開(1) —道徳劇から風俗劇へ— — 平田 満男

No.37



【発刊】1967 年

歴史における物語性 —歴史のことば(中の 2)— — 神川 正彦

ドイツの歴史学と極東 —(3)ゲオルク・ケルストの幕末日本研究— — 三宅
正樹

内村鑑三おぼえ書き(その 4) — 岩谷 元輝

文明の変動と世俗化(上)—世俗化の比較研究— — 山本 新

No.36



【発刊】1967 年

歴史における物語性 —歴史のことば(中の 1)— — 神川 正彦

ドイツの歴史学と極東 —(2)第 1 次世界大戦をめぐるヘルツレの研究— —
三宅 正樹

内村鑑三おぼえ書き — 岩谷 元輝

No.35



【発刊】1967 年

H.リードにおけるローマン主義詩論の成立 ――ぴき狼への道―― 相原 幸一

シェイクスピア本文の不定性 ― 平田 満男

マッシュー・アーノルド ― 中川 敏

Subcategorization の二三の問題 ― 足田 三良

No.34



【発刊】1966 年

ドイツの歴史学と極東 ―(1)オットー・ベッカーの極東外交史― ― 三宅 正樹

歴史の構図(下) ―その「ひろさ」と「ふかさ」― 神川 正彦

茶美の構造 ― 石田 吉貞

日本書紀古事記の語彙の比較研究(2)―紀記先後の辨資料― ― 富山 民蔵 彦

文明の世代論 ― 山本 新

No.33



【発刊】1966 年

分析書誌学派の動向 ― 平田 満男

歴史の構図(中)―その「ひろさ」と「ふかさ」― ― 神川 正彦

スピノザのコナツスについて ― 工藤 喜作

ニーチェにおける運命意識 ― 一つの覚書 ― ― 信太 正三

日本書紀古事記の語彙の比較研究(1)―紀記先後の辨資料― ― 富山 民蔵 彦

No.32



【発刊】1966 年

H.リードの芸術論(その1) — 相原 幸一

「恋する女たち」の主題 — 均衡と崩壊 — — 江頭 輝

鷗外とスペイン語(覚書) — 会田 由

コロンブス(1) — その生立と壮途出港まで — — 渡部 登

S→NP+VP — Verb Patterns 試論 — — 山下 雅巳

NOTAS SOBRE LA ENSEÑANZA DEL ESPAÑOL — Tatsuo Okada

EL SISTEMA ESCOLAR EN ESPAÑA — Jose Mata Trani

EL PRIMER AÑO DEL PLAN DE DESARROLLO ECONOMICO Y SOCIAL
ESPAÑOL — Jose Antonio Millan Fuerte

No.31



【発刊】1965 年

歴史の構図(上) — その「ひろさ」と「ふかさ」 — — 神川 正彦

スピノザに於ける愛のロゴス — 工藤 喜作

＜神の死について＞ — 信太 正三

文明設定の争点(2) — 山本 新

内村鑑三覚え書(その2) — 岩谷 元輝

No.30



【発刊】1965 年

メルビルのアメリカ批判 — 向井 俊二

校訂と「文学」 — ヴェニス of 商人・本文批評 — — 平田 満男

灰色の航 m をめぐって — オルダス・ハックスレイにおける二つの世界の分
裂 — — 須藤 明

Robynson 訳 UTOPIA — 文法覚書(補遺) — 松川 昇太郎

ドイツ文の分析 — 妹尾 幹

No.29



【発刊】1965 年

ヤスパースの政治思想 — 草薺 正夫

住民組織論覚え書(2)―行政と住民組織の機能― — 山田 操

史の意味への問い―一つの形而上学的問いの解剖学― — 神川 正彦

スピノザの神の因果性について — 工藤 喜作

文明設定の争点 — 山本 新

No.28



【発刊】1964 年

疎外の論理と「進歩としての歴史」―疎外論の克服のために― — 神川 正彦

住民組織論覚え書―横浜市におけるその経過について― — 山田 操

ハムレット校訂の諸問題―言葉というものは弄んでいる間にどうにでもなってしまう(十二夜)― — 平田 満男

スピノザの方法(2)―幾何学的方法の諸問題― — 工藤 喜作

刺戟伝播 — 山本 新

No.27



【発刊】1964 年

教育学に対する精神史の意義 — 長井 和雄

歴史のことば — 神川 正彦

スピノザの方法(1) — 工藤 喜作

ニーチェ解釈の方法試論 — 信太 正三

非西洋の近代化(3) — 山本 新

内村鑑三おぼえ書き — 岩谷 元輝

No.26



【発刊】1963 年

Wales の Bards と彼らの詩について — 須藤 兼吉

リチャード三世諸版本間の関係 — 平田 満男

「対位法」研究—その内容と形式について — 須藤 明

Shakespeare における should would の用法について—現代英語との比較 — 中村 駿夫

Here There And Everywhere?—英文法覚え書— 山下 雅巳

Robynson 訳 UOPIA —文法覚え書 — 松川 昇太郎

No.25



【発刊】1963

キリスト教のニヒリズム—ニーチェにおけるニヒリズムの問題 其の四— 信太 正三

スピノザの理性と経験 — 工藤 喜作

人間存在についての覚え書—単独者と全人類の間— 神川 正彦

非西洋の近代化(2) — 山本 新

デイドロにおける宿命論 — 永鳥 中

No.24|10 周年記念特集号



【発刊】1963 年

老桂冠詩人ジョン・メイスフィールド氏の海への郷愁 — 須藤 兼吉

ハーバート・リード序説 — 相原 幸一

『緋文字』におけるホーソンの「人生哲学」 — 島 秀夫

バートランド・ラッセルの宗教観 — 岩谷 元輝

近郊農村と農民—電波運動をめぐって — 山田 操

カへの意志と超人—ニーチェにおけるニヒリズム・其の三— 信太 正三

スピノザの合理主義と自然権 — 工藤 喜作

英語の語彙に入った日本語について — 田中 菊雄

非西洋における近代化 — 山本 新

十 年 の 回 顧 — 草薙 正夫

<新 刊 書 評> — 永鳥 中

人文学会十年の歩み — 長井 和雄

No.23



【発刊】1962 年

限界状況・挫折・超越ーヤスパース哲学の方法ー 草薙 正夫

スピノザの自然と延長の世界ー 工藤 喜作

T. E. ヒュームより H. リードへー 相原 幸一

伝播における様式と価値ー 山本 新

No.22



【発刊】1962 年

文化的エネルギーと教育ー 長井 和雄

ペシミズムとデカタンスー「ニーチェにおけるニヒリズム」其の二ー 信太 正三

スピノザの神概念の形成についてー 工藤 喜作

ヤスパースにおける哲学と科学ー 草薙 正夫

No.21|外国文学・語学特集



【発刊】1961 年

James Elroy Flecker の詩にみられる三つの要素ー 須藤 兼吉

H.リードの浪漫主義ー 相原 幸一

“ The Negro in “Benito Cereno” ”ー 向井 俊二

オルダス・ハックスレイー神秘主義への道程ー(下)ー 須藤 明

デイドロの小説とドイツー 永鳥 中

実存哲学者としてのニーチェーヤスパースのニーチェ解釈についてー 草薙 正夫

No.20|



【発刊】1961 年

ニーチェにおけるニヒリズムの問題ー 信太 正三

地域社会と行政広報(上)ー 山田 操

子供の成長と教育の冒険性ー 長井 和雄

実存とく交わり>ー 草薙 正夫

日本文明論の近視的性格ー 山木 新

No.19



【発刊】1961 年

シュライエルマッヘル教育学の市民的性格 — 長井 和雄

ニヒリズムと永遠回帰 — 信太 正三

文明の先達(下) — 山本 新

日本体育史試論—明治時代以前の体育と衛生— 古川 知生, 門田 昭三

No.18|外国文学・語学特集



【発刊】1961 年

Gates of Damascus — 須藤 兼吉

イエイツとエリオット — 島津 昭

H.リードの芸術教育論 — 相原 幸一

オルダス・ハックスレイ—神秘主義への道程—(上)— 須藤 明

フーゴ・フォン・ホーフマンスタールと危機の意識—「帰国者の手紙」をめぐる— — 菊池 武弘

代名詞考 —形態と機能— — 山下 雅巳

Shakespeare における shall will の用法について — 中村 駿夫

No.17



【発刊】1960 年

文明論の先達 — 山本 新

喪神群像 —其の二「白痴」— — 信太 正三

町村合併と部落—神奈川県内陸地帯の場合— — 山田 操

ヤスパースの歴史論 — 草薙 正夫

No.16



【発刊】1960 年

喪神群像 ―其の―「罪と罰」― 信太 正三

歴史的未來と教育 ― 長井 和雄

人間学と実存論 ― 草薺 正夫

トインビー批判 ― 山本 新

英語の強意表現考察―特に強意的直喩について― 山下 雅巳

<書評> 二つの歴史観―ブルトマンとレーヴィット― 信太 正三

No.15



【発刊】1959 年

人倫の意味構造 ― 信太 正三

ファシズム期の農村新体制 ― 山田 操

暗号解読としての形而上学―暗号及び暗号解読の構造― 草薺 正夫

キリスト教の伝播と近代日本 ― 山本 新

No.14



【発刊】1959 年

W.B.イェイツ ―「最後の詩集」序説 ― 島津 昭

エリオットとリード ― 相原 幸一

The Brigs of Ayr ― 須藤 兼吉

Melville's Quest for the Heart in Pierre ― Shunji Mukai

” <書評>(研究書解説) ” ”Essays in Linguistics” ” by Joseph H. Greenberg ” ― 杉原正孝

No.13|



【発刊】1958 年

経済更生運動と「窮乏の農村」―農村ファシズム化の進行― 山田 操

瞑想的ニヒリズム ―『地下生活者の手記』覚書― 信太 正三

文明の闘争と高度宗教 ― 山本 新

暗号解読としての形而上学(承前) ― 草薺 正夫

No.12|



【発刊】1958 年

文明論の誕生と系譜 — 山本 新

大正期「農村問題」の構造 — 山田 操

ヘーゲルの教育学的思考 — 長井 和雄

No.11



【発刊】1958 年

国家対人間の基本問題 — 大熊 信行

「地方自治」と地主制の展開 — 山田 操

家族的擬制の倫理 — 信太 正三

社会・科学=技術・文化 — 山本 新

暗号解読(Chifferlesen)としての形而上学(Ⅰ) — 草薙 正夫

＜書評＞大熊信行著「国家悪」 — 信太 正三

長井和雄著「シュプランガー」 — 村井 実

No.10|外国文学・語学特集号



【発刊】1958 年

詩 Dauber に描かれて海洋の姿態 — 須藤 兼吉

T・E・ヒュームとH・リード — 相原 幸一

「マーディ」について —メルヴィルの芸術の原型— — 向井 俊二

日本の詩の英訳について — 河野 一郎

若きリルケにおけるヤコブセンの影響について — 金子 正昭

Cockney—その発言と語法 — 中村 駿夫

No.9



【発刊】1957 年

カントにおける根本悪 — 信太 正三

煙草作地帯農村史(覚書其の一) — 山田 操

シュプランガーにおけるボン基本法と青年教育 — 長井 和雄

非西洋における革命 — 山本 新

No.8



【発刊】1957 年

フオイエルバッハ人間学の問題と逆説性 — 信太 正三

明治前期における農民の動向 — 山田 操

晩年の D・H・ロレンス — 飯田 耕作

ルネサンス(中) — 山本 新

No.7



【発刊】2005.3.

教育学における精神科学的方法 — 長井 和雄

形而上的反抗と自由の問題 — 信太 正三

ルネサンス(上) — 山本 新

書評・信太正三著『ニーチェ研究』 — 草薙 正夫

No.6|外国文学特集号



【発刊】1956 年

トマス・スタージ・ムアのガゼルズを読む ― 須藤 兼吉

メルヴィルの形成 ― 向井 俊二

T・E・ヒューム詩論 ― 相原 幸一

ラスキンの美学 ― 小倉 兼秋

トマス・ハーディ「ザ・デナスツ」の構想について ― 皆川 三郎

No.5



【発刊】1956 年

ニック・アダムズの脱出 ― 福田 実

日本農業と「二つの道」論 ― 山田 操

政治と宗教 ― 山本 新

<紹介と批評> ヤスパース著森 昭 訳『大学の理念』― 草薙 正夫

No.4



【発刊】1955 年

ニイチェにおける革命と反革命 ― 信太 正三

人間・この逆説的なもの ― 山本 新

シュプランガーの宗教論 ― 長井 和雄

イスパニア人の性格 ― 渡部 登

<書評> ヤスパース著 草薙正夫訳『現代の精神的課題』― 信太 正三

No.3|外国文学・語学特集



【発刊】1955 年

John Keats の Ode について — 相原 幸一

D.H.ロレンスに於ける対極の観念 — 飯田 耕作

ボードレエルに於ける交感のソネについて — 芹沢 純

リルケの『鎮魂歌』におけるテーマについて — 塚越 敏

“ ” “A FAREWELL TO ARMS” “ の主題 ” — 福田 実

代名詞にける格の転用に就いて — 小倉 兼秋

“A Friend of Mine” vs. “One of My Friends” — 勝又 永朗

詩劇エトナ山上のエンペドクレス — 須藤 兼吉

No.2



【発刊】1954 年

半封建的土地所有制と農地改革 — 山田 操

ニーチェに於ける「中世紀の終り」 — 信太 正三

十六、七世紀に於ける西班牙「騎士道小説」「牧人小説」「悪者小説」の発生と影響 — 大林 多吉

正統と異端 — 山本 新

ヤスパースにおける「包括者」の概念 — 草薙 正雄

No.1



【発刊】1954 年

ヘミングウェイにおけるニヒリズムの意味 — 福田 実

社会科学の立ち遅れ — 山本 新

ニーチェのパスカル問題 — 信太 正三

十九世紀に於けるドイツ国家意識の変遷 — 長井 和雄

原子力関係の諸書について — 菅井 準一